



林健一先生 討二枚で

目次

〔論 説〕

○真口魚類中の新目……………岸上 鎌吉……………一頁

○真珠貝養殖法に對する一改良に就きて……………奥田 謙讓
竹内 謙策……………五

○深湖底に棲むアカホーフラの一種 (Tanyarsus) に就して……………雨宮 育作……………三〇

〔講 話〕

○海洋學講話 (承前)……………原 十太……………三六

〔抄 録〕

●淡水魚の血液に於ける非蛋白質窒素の分布……………五四

●食用魚肉の研究、特に季節による

成分の差違に就て……………五四

●脱殻せる「カキ」に於ける冷蔵中の化學變化……………五四

●鹽藏したる海魚卵の化學的組成……………五五

●ブラジル産毒魚……………五五

〔雜 報〕

●本邦産ヒラアヂ屬 (Cymix)……………五五

●色彩記載法に就て……………六五

●富士北麓にある湖水に産する魚類……………七一

●北海道産鯀に就て (四)……………七三

●鞭毛類の發光……………七六

●ヤマメ……………七八

●コウライエビ……………七九

〔學會記事〕

○學會記事其他○會員名簿……………八〇

論

說

眞口魚類中の新目

岸 上 謙 吉

本誌第一卷以來度々サハラ・シビ・カツヲ等の構造、分類、分布等に就て論ずる所あり、其後も引續き此等の魚族の研究に従事中なるが、其結果從來の分類法を以前發表したる程度以上に變更するの必要を認むるに至れり、依て左に概略を記さんと欲す。

體の中軸に近く血合を有する魚は此を有せざる魚と大なる相違あり、且つ其相違は實に判然たるものなり、故に前者を硬骨類中より分離し、眞口類中の新目とし、又骨類と命名し、此に屬する魚を更にシビ科及カツヲ科の二に分たんとす、即ち本誌第一卷第一號に記したるシビ科は今度の新目に當り、シビ屬はシビ科となり、カツヲ屬・ヤイト屬・メヂカ屬を合せてカツヲ科とするなり。

新目又骨類は硬骨類の棘鱗類中サバ科・カシキ科・サハラ科等に近縁のものにして、特にサハラ科に

眞口魚類中の新目

26659

し、ヤマメとマスとの關係に就ては委しき研究を必要と認む。(岸上)

●カウライエビ とは朝鮮にて大蝦、關東州にて對蝦と呼ぶる、クルマエビ屬の種類に予の附けたる名稱なり、本種は舳狀突起の下側に四箇の鋸齒を有す、從來本邦に産するクルマエビ類にては此處に二箇以上の鋸齒を有するものなし、故に此等とは容易に區別する事を得、體は灰褐色、扇形部又舳狀突起は稍々紫色を帯ぶ。

殻は硬く、表面平滑なり、甲の側面は他の種類に於けるよりも後端に於て幅廣し、舳狀突起は殆ど直にして長く第一觸鬚の柄より長く、第二觸鬚の葉狀附器と略々長さ同じ、突起の上側には突出部の前方約二分一には齒なし、上側の第一齒は下側の最後の齒に相對す、突起に續く隆起は細くして甲の後縁に達する前に消失す、其兩側の溝は最後の鋸齒の後にて消失す。

第一觸鬚の鞭狀部の外枝は其柄の長に二倍す、脚は餘り太からず、第三脚著しく長し。

貯精腔はウシエビ、クマエビ等のものに似たり

雄交接器もクマエビ等のものに略々同じ。

本種は大體に於て *Penaeus indicus* に似たり、又ウシエビにも近し、前種とは舳狀突起、第一觸鬚の鞭狀部等により區別せられ、後種とは舳狀突起の鋸齒により容易に區別せらる。

予は此種を *Penaeus orientalis* として區別せんと欲す。朝鮮、關東州、青島等に産す、其南方の境界明ならず、或は印度に及び、其間種々の變化を現はすものにあらざる、*P. indicus* には二變種ある様に記載せられあるなり、此等の標本は印度博物館より寄贈せられ居れば支那南部の標本を得て比較すれば面白き結果を得るならんと信す。

本種は生長迅速、七月に約二寸のもの、八月下旬には三寸約二匁、九月中旬には五寸、約八匁に達す、従つて脱皮頻繁にして狭き活洲に蕃養する事甚困難なりと云ふ、關東州の家入四直氏よりの通信によれば好んで浮遊し、夜間水面に跳飛するを目撃すと言ふ。(岸上)